



卒業する君たちへ

岩手県立農業大学校 校長 千葉泰弘



本校の教育課程を修了する本科61名、研究科2名の皆さん、卒業おめでとう。

また、これまで皆さんを支えてこられたご家族の皆様方にも心からお祝いを申し上げます。

我が国の経済によりやく復調のきざしが見られているとはいえ、厳しい就職環境の中であって、ほぼ全員が卒業後の進路を決定したのは素晴らしいことです。進路指導に力を入れてきた本校としても、この上ない喜びです。卒業後は、自家就農する人、1~2年研修に出てその後就農する人、農業法人に就職して農業をする人、地域のJAや農業関係会社などに就職する人など、大部分の人は農業に係わりを持つ道に進みます。卒業後も、本校で学んだ知識や技術を思う存分発揮し、活躍してほしいと願っています。

とは言え、たとえ専攻分野のことであっても、本校で学んだことがそのまま役立つ場面は少ないはずで。本校では、自分の力で課題を解決する能力を養成することをねらいとして卒業研究に取り組んでいます。この過程で身に付けた力をいかに発揮して、進む道の先に待ち構えている問題を切り拓き、そ

れぞれの夢を実現することを切に望んでいます。

皆さんが入学したのは、東日本大震災津波の直後でした。本校に入学後、全国の農大から受けた様々な支援を被災地に届けたり、被災地の農業の復興の手伝いをしたり、いろいろな活動に取り組んできました。2年が過ぎても、被災地の復興状況はまだまだの状態であり、今後も様々な支援を必要としています。卒業後も、被災地に思いを寄せ、どんな形でも良いので、復興のために力を貸してほしいと思います。

農業・農村は、農業従事者の高齢化がかつけないほど進み、担い手の確保が喫緊の課題となっています。このような中で、若い力がみなぎる卒業生の皆さんは、地域から大いに期待されていることを自覚し、地域の担い手として飛躍するよう日々研鑽を積まれることを願っています。卒業は一つの区切りに過ぎません。高い志のもとに真摯な取り組みを心がけ、輝かしい未来を築かれんことを祈念し、卒業する皆さんへのはなむけとします。



平成24年度 学生進路状況

(単位：人)

経営科	人数	就農	進 学				研修	就 職						決定	受験中	
			計	研究科	4年制大学	その他		計	農業法人	農業団体	農業関連企業	公務員	実習助手			その他
農 産	13	3	0	0	0	0	0	10	1	3	3	0	1	2	13	0
野 菜	12	3	2	1	0	1	0	7	1	2	4	0	0	0	12	0
果 樹	7	0	0	0	0	0	2	4	2	0	1	0	0	1	6	1
花 き	8	2	2	1	0	1	0	4	2	1	0	0	0	1	8	0
酪 農	9	2	0	0	0	0	3	4	3	0	0	0	0	1	9	0
肉 畜	12	3	0	0	0	0	1	8	2	1	5	0	0	0	12	0
小計	61	13	4	2	0	2	6	37	11	7	13	0	1	5	60	1
研究科	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0
合計	63	14	4	2	0	2	6	38	11	8	13	0	1	5	62	1
割合		22%	6%				10%	60%							98%	2%

※「決定」は就農、進学、研修、就職内定の合計

平成25年3月6日現在

農業発展に向けプロジェクト学習の成果を発表

プロジェクト学習の成果発表会を12月20日に本校で開催しました。発表会では、2年生の運営委員の進行で、本科各経営科と研究科の科別発表会を経て選ばれた本科生15人と研究科生1人がそれぞれの研究成果を発表しました。審査は、中央農業改良普及センターの茂木善治所長を審査員長として、県農業農村指導士協会や県農業行政機関などから選任された7名の審査員により厳正に行われました。審査の結果、次の3名が表彰されました。



【最優秀賞】

新規就農に向けた トマト隔離床栽培の導入検討

研究科 高橋友佳子

1 課題選定の理由

卒業後は、自家の水稲育苗用ハウスを活用した雨よけトマト栽培による新規就農を目指している。

このため隔離床栽培として予定しているプラスチックコンテナ利用区（以下「コンテナ区」という）と不織布ポット利用区（以下「ポット区」という）における生育・収量性・経済性等を比較検討した。

さらに、トマトの隔離床栽培を経営に取り入れるための条件も明らかにした。

2 実施方法

コンテナ区とポット区によるトマトの栽培比較試験の実施。供試品種は桃太郎サニー、定植は5月29日、施肥・灌水方法は点滴灌水施肥を実施（総窒素供給量17.0g/株、総灌水量351L/株）

3 結果

(1) 主茎長等の生育状況はコンテナ区がポット区に比較してやや良かった。

(2) 総収量は、コンテナ区が1,234kg/aとポット区の1,146kg/aをやや上回ったが、商品果率はポット区が53.5%でコンテナ区（41.1%）を上回った。

(3) コンテナ区とポット区の経済性比較では、収量、必要資材等をもとに試算した結果、コンテナ区がポット区に比べ、わずかに有利であることが明らかになった。

4 考察

(1) 両試験区とも商品果率が低かったのは、裂果・規格外果が多発したためであり、苗が徒長傾向だったことや、9月下旬の気温低下等が要因として考えられる。コンテナ区では、9月の裂果多発が更なる商品果率低下を招いたが、コンテナ内の土壌水分が良好ではなかったことが要因の一つと推察される。

(2) コンテナ区はポット区に比べ生育がやや優れ、苗質改善や天候に応じた灌水調整等によって収量性・収益性のさらなる向上が可能と考えられるため、就農にあたってはコンテナ栽培の導入を検討したい。

(3) 就農後に隔離床栽培（コンテナ栽培）を導入するためには、商品果収量8,300kg以上の確保が必要である。



【優秀賞】

スターチス・シヌアータの培養苗を用いた夏秋作型の実証

農産園芸学科
花き経営科 2年 千田 涼太

1 課題設定の理由

本県のスターチス・シヌアータの生産は、12月に無加温ハウスへ定植して翌年5～6月に出荷する秋まき無加温作型が一般的であるが、経営面での魅力が低下している。秋作型は、高温期による脱春化や品質低下などの理由で生産が難しいが、夏季冷涼な北海道では産地が形成されており、高単価で取引されている。

そこで、夏秋用品種として普及している培養苗を用い、高温による影響を回避する技術を組み合わせることで、本県で夏秋作型の成立が可能かどうかを検証する。

2 実施方法

(1) 試験区の構成

- ・実生苗と夏秋用が開発された培養苗の作型適性を比較する。
- ・培養苗の定植時期（4月中旬、5月中旬）と採花時期及び収量性・品質を調査する。
- ・定植時のマルチ資材について、白黒ダブルマルチと反射マルチの地温低下の影響を把握する。
- ・高温期定植（6月中旬）において、培養苗の夜冷育苗が抽台に及ぼす影響を調査する。

(2) 供試品種 実生苗：アーリーブルー
培養苗：ブルーギャラクシー、炸弾パール

3 結果

(1) 良品採花本数は、培養苗を4月中旬に定植し、白黒ダブルマルチを用いることで株当たり約24本と最も多収となり、高規格品率は約7割に達した。一方、実生苗は品質が劣り、良品生産が困難であった。

(2) いずれの定植時期でも、採花時期は8、9月を中心とする7～10月となった。また、5月中旬以降の定植では、反射マルチと夜冷育苗の併用により、9～10月に採花本数の増加傾向が認められた。

4 考察

培養苗の収量性や品質等は極めて優れており、岩手

県における夏秋作型への適性は高いと思われる。

4月中旬に白黒ダブルマルチを用いて培養苗を定植する夏秋作型は、市場で品薄となる7～9月に出荷が可能となり、慣行の秋まき無加温作型より収益性が高く、有望である。



【優秀賞】
就農に向けた我が家の酪農経営改善
～効率的な作業体系の検討～

畜産学科
酪農経営科 2年 高橋梓紗

1 課題選定の理由

酪農を中心とした複合経営の我が家では、作業が集中する秋に労働力不足となり、飼料用トウモロコシ(以下、トウモロコシ)の適期刈取りが難しく、良質なコーンサイレージ給与ができない等の課題がある。これらの課題を解決し、就農後の所得向上を図ることを目的として、我が家に適したコーンサイレージ生産技術の導入及びより効率的な農作業体系の確立を検討した。

2 実施方法

(1) 我が家の経営概要

ホルスタイン種約30頭(搾乳約25頭)を飼養し、家族3人で作業
草地:4.3ha(受託:7.5ha)、水稻:4.4ha(受託:5ha)、飼料畑:3.5ha(トウモロコシ/RM120)

(2) 調査・試験概要

A 現状分析

我が家の年間農作業体系を見直し、課題抽出と対策の検討を行った。

イ トウモロコシ栽培の検討

① 試験1「飼料畑の土壌分析」

2つの飼料畑を分析し、肥料の検討を行った。

② 試験2「トウモロコシの品種比較」

早生3種(RM80・88・90)・晩生4種(RM118・

122・125・127)の生育及び収量調査を行った。

③ 試験3「コーンサイレージの栄養成分分析」

試験2の早生3品種で調製した2種類のコーンサイレージの成分分析を行った。

3 結果

- (1) 現状分析によりトウモロコシ刈取り時期の遅延、それに伴う良質コーンサイレージの不足及び閑散期の存在が明らかとなった。閑散期の労働力を活用した適期刈取りとコーンサイレージの品質向上を図るため、早生種と晩生種の2品種の作付けを検討した。
- (2) 試験1よりpH、石灰などは基準値以上だった。リン酸と加里を過剰に施肥していたことが判明し、肥料の成分を下げ肥料経費の削減ができた。
- (3) 試験2より早生種でも6,000kg/10a以上の収量が得られた。収穫も閑散期に行えるため、労働力不足の解消にもつながった。稲刈り後に行う晩生種では、RM127も適期収穫が可能だった。

- (4) 試験3より早生種のコーンサイレージでもTDNが基準値以上、各種ミネラルのバランスも良好となり、良質なコーンサイレージができた。

4 まとめと考察

早生種を作付けし1回目の刈取り時期を慣行より早めること、また、晩生種は慣行よりさらに刈取り適期の遅い品種を作付けすることにより、ほぼ全てのトウモロコシの適期刈取りが可能となる。これにより、収量を確保することができ良質なコーンサイレージの通年給与が可能となる。就農後はこれをもとに、コーンサイレージの通年給与と体系を確立し、所得向上を目指していきたい。

東日本農業大学校等協議会プロジェクト発表会 (1/21~22、青森市アピオあおもり)

1月21日、22日の両日、標記プロジェクト発表会が青森市で開催され、本校を代表し2年の千田涼太さん、高橋梓紗さん、研究科の高橋友佳子さんがプロジェクト発表を、1年の高橋孝輔さん、小坂亮太さんが意見発表を行いました。

本校の学生達は実に堂々と発表し、将来がとても頼もしく感じられました。

さらに研究課程で新規就農に向けたトマト隔離床栽培の導入検討と題し発表した高橋友佳子さんは最優秀賞を受賞し、2月19日~22日開催された全国大会においても、最優秀賞に次ぐ特別賞を受賞しました。



東日本農業大学校等協議会プロジェクト発表会↓

平成24年度東日本農業大学校等協議会プロジェクト発表会

↑全国大会で特別賞を受賞した高橋さん、右は同研究科の千葉さん



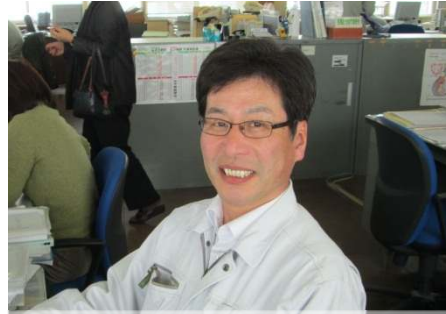
卒業おめでとう。勉強に、友好に、バイトにと、それぞれ力の入れどころは違ったようですが、2年間頑張った成果を糧に、これからは社会に貢献していきましょう。陰ながら応援しています。

農産経営科 中野央子



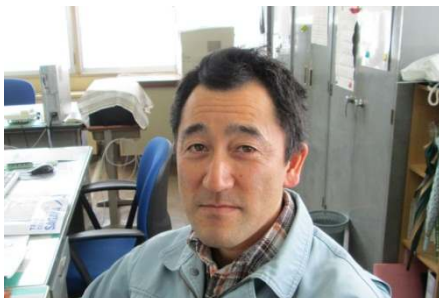
今までに得た知識や思考力は、目に見えない財産です。この財産を糧に、将来の大きな飛躍に向けて、新しい環境で充実した日々を送ってください。卒業おめでとう。

野菜経営科 深澤明子



卒業おめでとう。いろんなことがありましたが、みんな、仲良く頑張りました。ピザ釜で焼いたピザも美味しかったです。これから、それぞれの道を歩むわけですが、人生という舞台上、自分らしく“花”と開いてください。

花き経営科 佐藤 弘



農大で学んだ知識や技術、育んだ友情、そして失敗の数々... 経験したこと全てが、将来必ず役に立つと思います。君たちの豊かな個性は、磨くほどに輝きを増すはず。今後のご活躍に期待しております。

果樹経営科 阿部洋



伊藤さん、熊谷君、菅原君、高橋さん、中村君、廣戸君、村岡君、八重樫さん、谷地畝君、卒業おめでとうございます。それぞれの夢に向かって、頑張ってください。明るい未来が待ってます。

酪農経営科 村上隆宏



卒業おめでとう！！社会に出る前の貴重な2年間を一緒に過ごし、皆さんの成長を見てきましたが、今後が楽しみです。社会に出てもしっかりと農大で学んだ経験を生かしていきましょう。皆さんがそれぞれの道で活躍していくことを願っています。

肉畜経営科 高杉 亘



とても楽しく充実した研究科の1年間でした。就職、就農と2人とも進路は異なりますが、それぞれの「夢」の実現に向けて諦めずに努力してください。いつか必ず実現すると確信して！。夢実現に向け陰ながら応援しています。

研究科 長森克之



春を待つ農大の桜並木



～ 今後の主な行事予定 ～

4月 8日	始業式	4月26日	全校ガイダンス
4月 9日	新入生入寮	5月17日	父母の会総会・保護者懇談会
4月10日	入学式	5月29日	学生自治会総会
4月11日～12日	新入生ガイダンス	5月30日～31日	東日本農業大学校等親善球技大会（福島県）
4月17日	学生健康診断		